

2021/2/22-2

(うとQ世話し 暇地獄)

商売をやっている、最近人からよく訊かれるのが

「儲かりもしない。女にももてない。苦労ばかりを押しつけられる。一体何が面白くて、商売なんかしているの？」

とかです。

それに対して

「苦労マニア」

と冗談めかして答えているのですが、正しく言えば

「暇地獄を知ったから」

なのです。

以前、うつ病で、仕事が回ってこず、回ってきても何も出来ず、怖くて逃げてばかりいたときがありました。その後ろめたさ、たるや。

しかし、それ以上に机に向かってパソコンを開いても、何もする事がなく、ただひたすらチャイムが鳴る迄「残り後、何時間何分」と数えてばかりいた時の「暇である事のつらさ」それをイヤというほど味わわされ、そこから派生して、定年後、仕事が無くなったら同じような状態になる事を想像し、

「そんな思いだけはもう二度と味わいたくない」

と思ったからです。

「それを避けるためなら、大損でも大けがでも、大苦労でも良い。その方がよっぽどマシだ」
と思ったのです。

しかもその苦労が困難であればあるほど、簡単には暇にならないという、たったそれだけの理由から

「敢えて難問に取り組む様になった」

というのが正確な理由、即ち正解かもしれません。

うつ病までは行かずとも、想像してみると解るのですが

「大手術を終えて、やっとの思いで生還したのに、その先元気になってもやる事が全くな
い」時の絶望感を。

毎日が「日曜日でありすぎる事」からくる「生命力や活力の長期暫減傾向」に歯止めの掛らない「チョロチョロ漏水感（老衰感、とも）」や、何をしても良い筈なのに却って何をして良いのか解らない、戦う相手を特定できない「徒手空拳感」

結果、そのうろたえや狼狽の姿を見せまい、見透かされまいとして「ありもしないリア充実や威厳」を維持する為の「虚勢の日々と、そこから来る言い様もない疲労感と虚しさ」に覆われ、益々本当の解決から遠のいていく誤り。

国民救済の筈が却って富の偏在を招き、格差拡大しか生まない金融緩和の如き相反乖離。その心理的地獄に比べたら「大損や大けが、大苦労なんて、まだカワイイもん」です。

言い方に語弊があろう事は十分承知の上ですが

「所詮人生暇潰し」

(であるなら、楽しく面白いと感じられる事をやった方がいい。例えそれが困難に満ちており、苦勞の連続ばかりで、休む時間すら無かったとしても)

「休むのはあの世に行ってからでも遅くない」

という(訳ですから)、我が国の偉大なるコメディアンという言葉に尽きるような気がします(括弧内は筆者の言説)

追記)

例えば、難事件解決に大活躍中の杉下右京さんや榎マリ子さん達が定年退職したあと、どのような心理状態になり、どんな生活を始めるのか？それを想像してみるのも良いかもしれません。

才能ある人が、その天職が終わった後どうするのだろうか？という

それこそ「暇地獄対処法」という超難問を今から解いてみるのも面白いかもしれません。